

相撲取りが齒切を咬むやら、驅落者が夜通しイチャ／＼申して、一目も寝かし居らん、今宵ほどの様な部屋でもよいから閑靜なる部屋へ泊てくれと申したに、隣の部屋は何事ぢや、ヤレコラドッコイの散財がすむと、後が相撲ぢや、拙者枕を取つて寝ようと致したが、頭がビヨ／＼と動いて寝られんではないか、向方を見よ、襖に大きな穴を開けよつた、あらう事かあるまい事か、假令一夜たりとも借受けたれば武士の城廓同様、それに何ぞや脛を突き出すとは無禮千萬、隣の部屋を取り替るか、拙者の部屋を取り替るか、靜に致すか、三ツに一ツの返答を聞いて參れ」

「へい誠に相濟ん事で、一寸下が一時になつて居りましたので、暫くお待ちを……モシ、靜にお頼み申しまつせ」

「伊八とん、此方へ這入つて、清八サン無茶やで、勝負あつたと云ふてるのに、ボンと打投て床柱で頭を打つてこんな大きな瘤が出来た。向方の襖を蹴り破つたが勘忍してや、まだうさかい……」

「襖は大事おまへんが、隣のお侍、甚い恐つてまつせ」

「ア、伊八どん濟ん、侍を忘れていたんや」

「忘れて居て貰ふたらドムなりまへんがな、お侍恐つて、假令一夜たりとも借受ければ城廓同様、脛を突き出すとは無禮千萬何事ぢやと云ふてまつせ」

「伊八とん、あんぢよう言譯云ふて、モウ靜にする」

「そう仕て貰はんと私の方が困ります、どうぞお靜に」

「オイ無茶しなゐな喜イヤン、俺がおとなしゆう寝て居るのに、禰取つて相撲を取るよつてにや」

「源さんが悪いねん、行司を仕たりするよつてに立上つたりするねん」

「オイ、相撲の話を仕たりするさかいにや、艶事の話、惚氣、是れなら暴れる氣づかいはない」

「源さん惚氣の種があるか」

「あるか……あるか……オイ、私等な、人二人殺して金を三百兩取つて未だに知れんと云ふ、こんな艶事を仕てるね」

「フム、人を二人殺して三百兩取つて未だに知れん、それは一體どう仕たんや」

「オイ寝てんかゐな、起きて来てどうするねん、私が極道を仕て親の家を飛び出して、高槻の叔父きの世話になつて居たんや、叔父きの商賣が小間物屋、私も小間物の背負ひ商人で得意廻りを仕て居ると、或日の事、小柳彦九郎と云ふお屋敷から誂へ物があるから来てくれと云ふ手紙が来た、早速荷物を持てお屋敷へ行つた、へ小間物屋で御座ります、何か御注文をと云ふと、奥さんが、オ、小間物屋か、よう来て給つた、さあ此方へ上りや、と奥の間へ通しよつた、今日は女中が皆里歸りを仕て居らぬ、そなた酒上るか、へエ、少々頂きます、暫く待つて居や、暫くすると酒肴が出る、何も無いが一ツ飲みやいのう、有難うさんで御座りますと私が飲んで、奥さん一ツ如何で、